



# 男は 痛い !

國友万裕

第22回

『恋妻家宮本』

## 1. 九州が怖い！

「たまには帰りなさい。1日帰るだけでいいんだから。私はもう来年で満80歳なのよ。いつまでも生きているわけじゃないんだから」電話口で母が言った。母には感謝している。弟にも感謝している。その感謝を伝えるために母の誕生日、弟の誕生日、法事の日などには必ず甘い物を送っている。電話も毎日かけている。しかし、母としては顔を見たいのだから。

「80になったら、京都に来なよ。ちゃんと介護してあげるから」と俺は返事する。行きつけだった食堂の女性も秋田からお母さんを京都に呼ばれた。

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、どうやって私が80になって、何も知らない町で暮らすのよ」と母。

「まだ強迫症が抜けないんだよ。家をあけると、その間に泥棒が入るんじゃないかとか思ってしまうんだ」

「でも、東京にはちょくちょく行くじゃないの」

「東京は仕事で行っているんだよ。仕方がないから」

俺は九州に帰るのが怖い。九州に連れ戻されるのが怖い。勿論誰もつれ戻す人なんていない。しかし、俺は何らかの運命のいたずらで、九州に戻る運命になるのをひたすら恐れているのだ。

俺の中の葛藤は今でも理不尽に俺の中を巡り巡っている。九州にいた頃は理不尽なことが次々に起きた。九州のせいじゃない。たまたま巡り合わせが悪かっただけのことだ。し

かし、俺は自分を許すことができない。なぜ、俺だけがあんな目に！俺は、この理不尽な思いを九州のせいになりたいのである。

3年ほど前についた30代の女性カウンセラーは言った。

「ジェンダーの人は社会のせいにしてしようとする。でも、精神分析は自分の問題として捉えるんです」

その考えはおかしい？　そういう返され方をするから俺は不登校になったのだ。例の裸授業が始まってから俺の心は雪崩のように崩れていったのだった。もし、あの時に授業中に裸にさせられることがどうしても抵抗があるんだと周りに話していたら、俺は不登校にはならなかったかもしれない。常識から考えても冬場に半裸で授業させるなんて、行き過ぎである。あそこまで極端な男根教育をする先生は滅多にいるものではないだろう。

「同じ気持ちを分かち合える人がいないんです」と俺が言うと、「その時一緒に脱がされた子がいるじゃないですか」と彼女は返してきた。

「脱がされる。。。」この言葉に俺はキレた。女の子を脱がせたりしたら、それこそ大問題だ。セクハラ教師として訴えられ、懲戒免職だろう。女優さんが自分から「脱ぐ」ことはあっても、監督に無理矢理に「脱がされる」なんてことになったら大問題だ。女の子だから胸を見せるわけにはいかないと思うかもしれないけど、上半身裸と言ったら水着と一緒に。女の子をプールの時間でもないのに水着にしたら、これまた大問題。なぜ、この女はひたすらジェンダーを肯定しようとするのか、俺のトラウマを否定しようとするのか、そんなのが精神分析なわけ？　カウンセラーだったら

相手の気持ちを受容するのが役目なのでは？？？　俺がカウンセリング講座に通っていた時、相手と話す時には、Yes, and（わかります。それで・・・）という調子で話さなくてはならないんだと教わったものだった。しかし、彼女は一貫して、No, but（でも、。。。）だった。彼女は自分の常識で相手を見て、自分の理解できないことは大した悩みじゃないんだと思っている。人間って、一種類じゃない。人とは違う悩みであればあるほど、当事者は余計に苦しい。だからこそ、カウンセラーが必要になってくるのだ。

不登校の走りだった俺は辛酸を舐めるような体験をした。今だったら、不登校への理解も、学校や先生の問題も、子供の人権も社会的に認知されているが、あの頃は理解がなかったが故に、ただでさえズタズタに傷ついている俺の心はさらに破壊されていくことになったのだった。「あんたの言っていることは、不登校の子に向かって、『学校が好きな子もいるじゃないですか？』と言っているようなものなんだよ！　そんなこと言ったら不登校の子は余計に追い詰めるだろう！　あんたなんか京都でカウンセラーやっていると知っているわけ！！　九州に戻って、顔を洗って出直してこい！！！」と言いたいところだった。

俺たちが学生の頃に『ふぞろいの林檎たち』という山田太一原作のドラマがあって、このドラマでは時任三郎と手塚理美が恋人同士なのだが、時任は彼女に結婚したら仕事を辞めてほしいと思っている、これに対して絶対に仕事を続けたい手塚は次のように返す。

「じゃあ、あなたは結婚したからって、仕事辞められる？」

「男と女じゃ別だよ」と時任。

「一緒よ」と手塚。

これと同じ議論が俺とこのカウンセラーの間に起きようとしていた。

「じゃあ、あなたは、脱がされることに抵抗がないの？」と俺は問いかけたかった。彼女は、男と女は別。女が脱がされるのは大問題だけど、男が脱がされるのは問題にするべきことでもないと思込んでいるのだ。

俺が彼女のカウンセリングを受けようと思った一つの理由は、彼女が九州から出てきたばかりのカウンセラーで、九州の女性に憎しみを抱いている俺には九州の女性から自分を理解してもらうことが回復へつながることになるのではと思ったからだった。しかし、それどころか、「やはり、九州の女は」という偏見が俺の中に強まってしまった。「九州の人は社会を受け入れようとする、関西の人は社会を変えようとする」、それが俺がずっと抱えてきた偏見だった。俺みたいな社会に文句をつけるやつは平気で白眼視して、村八分にしようとする。それが九州の連中だとずっと思ってきた。

九州にはやはり帰らない。帰れない。ある映画で、「人は異質のものを憎む」という台詞があった。俺は思えばみにくいアヒルの子だったのだろう。クラスの中で浮いている異質の存在だった。今でもその時の惨めさは拭えない、恐怖は終わらない、俺は人と付き合うときにいつだって自分の方が付き合ってもらっているという意識で生きてきた。相手が誘っている時であっても、俺の本当の姿を知れば嫌いになるという気持ちで生きてきた。九州にいた19年間、俺はジェンダーの呪縛を受け続け、そこから立ち直るのに膨大な年月が

かかったのだ。

俺が女嫌いになったのも、あまりにも辛い少年時代のせいなのだ。毎日学校で女子たちから「気持ち悪い」といわれる日々。それが3年も続いた。俺は自分のどこがどう気持ち悪いのかがわからず、女は怖いという感情は日に日に募っていった。結果、高校に入るのと同時に心は壊れたのだった。

## 2. 同化できる人を求めて。

俺の九州への思いは確かに偏見だろう。俺は京都に来てからはいわゆるインテリ系の人としか付き合っていない。全然、勉強ができないようなやつはそもそも大学になんかいかない。まして大学院になんて行かない。大学の先生になんかならない。京都は大学がたくさんあるから、インテリが多い街で、急進派の左翼の人も多いのだが、一般の庶民たちはそこまでリベラルではないだろう。一方、九州にいた頃は、市内でも最も柄の悪い、ほとんど少年院のような中学に通っていたのだ。一般に柄の悪いところは悪い意味で男性的になる。これは前に問題を抱えた少年たちの指導員の男性が言っていた。勉強もできず、家庭的にも恵まれず、お小遣いも満足にももらえず、イライラしている彼らには、人を威圧する力しかない。虚勢をはる力しかない。弱い奴をいじめる能力しかない。

俺は京都に来てからそういう層のやつらと付き合っていない。前に専門学校の学生たちに、今の中学生は皆、制服だっておしゃれだし、おっとりしているよねと話した。俺は電車やバスで中学生たちを見かけるといつもそう感じていたのだ。すると学生たちからは、

「電車に乗っているような中学生は私立の中学の子ですよ。ああいう子を基準にして考えるのは違ってきますよ」と言われたものだった。

俺はもう 20 年以上も心療内科に通っている。俺の周りの人たちは、それくらいは気にしていない。この頃は鬱の人や強迫症の人は大勢いる。しかし、最初についたカウンセラーの先生はうっかり口を滑らして、慌てたものだ。「とんでもないですよ。まだきちがいだという偏見で見る人はたくさんいるんですよ」

そうなのだ。俺は大学で生活をし、インテリさんたちに囲まれ、近所付き合いもなく、電車を通う私立学校の生徒ばかりを見て生きてきたのだ。京都という町のほんの一部しか知らない。したがって、九州が悪で、京都が善だと判断を下すのは明らかに俺の偏見なのだ。しかし偏見だとわかっていながらも、すべて悪いのは九州のせいにして、俺は京都を自分の居場所にしようと頑張ってきたのだ。俺にはそうするしか生きることができなかった。

専門学校で教えていた頃のことだ。専門学校は 1 クラスが 20 人弱なのだが、その 20 人の中でも山が 4 つくらいに分かれる。やんちゃ系の男子、ギャル系の女子、真面目系の女子、そしてどのグループにも属さない孤島組。

俺の目から見ればやんちゃ系の子であっても根は悪い子じゃないし、もう皆 18 歳は過ぎているから、度を越したことをするわけではない。しかし、そういう子達を放任していると、真面目系の女の子たちが教務にクレームを言いに行く。学生たちは些細な性格の違いであっても不快に感じる。同じ日本人、同じ

年代であっても、人によって文化は違うのだ。どちらの文化にも馴染める柔軟性のある人間ばかりではないのだ。女子学生たちの告げ口には本当に悩まされたが、俺だって若い頃は周りに同化できない子だったから、怒るわけにもいかず、ジレンマに悩まされたものだ。

俺の人生は、自分が同化できる人を探し続ける旅だった。理屈ではなく俺は本能的にそういう奴を求めていたのだ。俺が親しくしている男友達は中学くらいから私立のところに通っていたようなお坊ちゃんが大半である。そういうやつだったら、極端なマッチョ教育は受けていないだろう。暴力教師や人のことをきもいという女子生徒もいないわけではなさそうだが、俺の行っていた中学に比べれば、はるかに風紀は良いことは事実のはずだ。親だって、しっかりしているだろう。過酷な環境を生き延びてきたような雑草のような連中には俺は親しみを感じない。俺が私立のところに行っていたら、男子校に行っていたら、彼らのような環境で生きてきたら、俺の人生はあんなことにはならなかったかもしれない。そういう思いを抱かせてくれるから俺はお坊ちゃんに親近感を抱くのだった。

俺はかれこれ今住んでいる界限に 27 年以上住んでいる。その間、近所にはシネコンができ、スポーツクラブもでき、立命館や佛大のキャンパスもできた。俺は見慣れた風景を毎日見ながら生きてきた。しかし、俺は京都の一部しか知らない。インテリしか知らない。

5 年くらい前のこと、「國友さん、自転車に独り言言いながら走っているということ有名みたいですよ。お客さんが言っていた」と整骨院の威勢のいいお兄さんから言われたもの

だった。思えば、これだけ長くこの限界で生きているから、近所の人たちは皆俺の姿を見たことがあって、俺が自転車で独り言を言っていることも気に留めていたのだろう。近所の噂の笑いものだったのかもしれない。

1年ほど前に二条駅の近くのカレー屋さんが閉店になったのだが、その閉店の1ヶ月ほど前にそのお店に行くと、「来てくださってよかった。一番長く来てくださっていましたものね」と店の人から言われた。俺はこの店が好きで、時々行ってはいたけど、店の人たちと友達だったわけではない。しかし、店の人たちは俺の顔をきちっと覚えていて、一番長いお客さんだとある種の特別な目で見てくれていたのだった。

俺は京都で長く暮らしてきたとは言っても、こういう市井に生きる人たちと生活を共にしてきたわけではない。ずっとマンション暮らしだ。隣の部屋の人の顔すら知らない。やはり、九州のせいにはできない。でも、俺は九州のせいにしてしまいたい。心が壊れた責任を…。俺は社会全体から踏みつけにされた。理不尽に傷つけられた。しかし、社会はそれを理解してくれなかったのだった。

思えば、外国に行った方が良かったのかもしれないと思うことが度々ある。外国だったらどっちにしろ外人だ、違った文化の人という前提で見てもらえる。外人だからある程度のことは大目に見てくれるだろう。しかし、日本人でありながら、普通の日本人の主流とは違った文化を生きてきた俺はずっと孤独な生活を余儀なくされたのである。

この喪失感は、いつまでたっても消えてはいかない。あと27年たったら、俺は80歳だ。もう死んでいるかもしれないなあ。それま

でに、この思いにどうにか決着をつけてしまいたい。

俺は運が悪かったのだ。しかし、俺が心が壊れて、高校に行かれなかったという事実は消すことができないのだった。俺は一生消すことのできない烙印を押されてしまったのだった。

### 3. 自信について

専門学校をやめる年、「もっと自信を持って授業をしてください」と授業アンケートで書かれた。大学の方ではこんなことは言われないのだが、専門学校と大学では学生が先生に求める資質が違ってくる。専門学校の場合は予備校に近いので、予備校系の先生のような人が多いし、実際学生もそれを求めている。

権威を持つということ、断定的な口調で話し曖昧な言い方は避けるということ、また授業の予習をしていない時であってもたっぷり準備をしてきたんだというフリをして授業を進めるということが専門学校で授業を進める上でのポイントだった。俺はいつだって自信がなさそうな態度をとるので、学生たちは不安になる。これから編入や就職があるのに、こんな先生について行って大丈夫なのかという気持ちになる。ハツタリをきかすのも一つの技術なのである。

「先生、なんでそれだけ知識があるのに堂々とししないの？」と学生からも言われたこともあった。しかし、俺は自信家にはなれないし、なりたくなかった。これまでの人生、俺を貶め、傷つけてきたやつはことごとく自信家だった。自分が正しいと信じ込むことは暴力や確執を生み出していくのである。

自信を持つと学生が付いてくるのは事実かもしれない。しかし、これじゃあ、ヤンキーと一緒に。「ヤンキーなんて、一番上に親分肌のやつがいて、下のやつはそれに追従しているだけのことだ」と友人から言われたこともあった。そんなのが良いわけ????? もちろん、そういう教育が有効である場合もあることは認めるけども、そうでない先生もいていいんじゃないの? 人によって文化は違うのだから、先生も色々だよ。事実、俺の価値を認めてくれる学生も大勢いたのだ。今でも Facebook でつながり、一緒に食事や温泉やプールまで付き合ってくれる学生が専門学校時代の教え子の中に何人もいるのである。

#### 4. ネタバレ注意 (笑)

『恋妻家宮本』(遊川和彦監督・2017)

この原稿を書いている最中にまるでシンクロのようにこの映画に出会った。まさに神様が与えてくれたような映画だった。

阿部寛の主演である。彼が演じる 50 男は教師なのだが、自分に自信がないタイプで優柔不断、生徒からもいい人だけど頼りないという目で見られている。阿部寛は、昔のモデル時代からシャイで情けない奴というイメージはあったけれど、それが今は彼の持ち味になっていて、なかなか良いのである。

この映画で彼が演じる男は学生時代に彼女を孕ませてしまったため、そのまま結婚し、すでに 27 歳の息子がいる。この息子の名前をつけるときに、「正」と「優人」、どっちにしようかと彼が迷う場面が出てくる。

これは内輪ネタだけど、中村正先生が以前、ある講座で、「なぜ、こんな名前、僕につけた

の?」と親を責めたことがあるとおっしゃっていたことを思い出して、思わず笑ってしまった。

結局、主人公は息子に「正」という名前をつけることになる。そして、この映画ではこの名前が話の一つの鍵を握っている。「正」と「優人」、全くニュアンスの違う名前なのだが、これはこの主人公の葛藤を物語っているのだ。この映画、正しさと優しさの相克のドラマなのである。

すなわち、正しいことをしようとしながらも、優しさ故に迷わざるをえない主人公の性格を物語っているのである。彼が自信がないのは、常に相手のことを考えているため、自分が正しいと思うことを他人に押し付けることができないのである。「正しさは戦争を起すこともある。しかし、優しさは…」というセリフが出てくる。この台詞はまさに俺の意を得たりだった。

昔は確かに「正」とか「勇」とか戦争につながりそうな名前が多かったように思う。しかし、この頃はめっきり減った。俺は先生なので、たくさんの学生の名簿を見ているが、「翔太」とか「裕樹」とか可愛い系の優しさを感じさせる男の子の名前が増えてきた。こういう名前が増えてきたことは、歓迎すべきことなのだろう。こういうと中村先生に失礼のようだが、この映画の主人公が、「優人」にしようかと迷いつつも、息子に「正」という名前をつけるのは、この主人公が純粹に正しいものを求めているけれど、その純粹さゆえに何が正しいか判断できないことを示していて、正しさを否定するという事ではない。それは誤解しないでほしい。

映画自体は、笑わせるコメディで、最後の

方がちょっとダサいのだが、見ていて、飽きさせない。心温まる、楽しい映画に仕上がっている。

この原稿が出る頃、俺は 53 歳になっているはずだ。「あなたもうおじいさんなんだから」と母は電話で言う。俺は阿部寛と同年代なので、27 歳くらいの子供がいて、もう孫がいても不思議ではない。昔だったら、人生 50 年。おじさんからおじいさんへの移行期である。母は、俺が女性恐怖であることはわかっているから、俺が結婚することは期待していない。ただ、「50 にもなった人がコンビニなんかで何もかも済ませるみたいな生活しているのかと思うと悲しくなる」らしい。今の俺は息子代わりの付き合いをしてくれる元教え子やもう 15 年以上の付き合いの大親友もいる。あれこれ相談に乗ってくれる人も大勢いるから、それほど惨めなわけじゃない。コンビニで買い物するのは仕事が忙しくて、他のところに行くゆとりがないからだ。

もうすぐ誕生日だ。母に誕生日のプレゼントは孫の手をくれなかと頼んだ。年取ってきて肌が乾燥してきたせいか、この頃背中が無性にかゆい。「孫の手なんか郵送料の方がかかっちゃうじゃないの」と母。でも家族の贈り物だから、大事に使うよ。家族を持つことはできない男だけども（笑）。